

修士論文（要旨）

2011年7月

中国の大学におけるレベル差のある日本語学習者間の会話活動  
—学習者同士が人的リソースとなって—

指導 齋藤伸子 先生

言語教育研究科

日本語教育専攻

209J3906

張曉敏

## 目次

<b>第1章 研究背景と目的</b> .....	<b>1</b>
1.1 研究の背景.....	1
1.2 研究の目的.....	1
<b>第2章 先行研究</b> .....	<b>3</b>
2.1 中国の大学のシラバスと学習目的.....	3
2.2 孤立環境における日本語教育について.....	3
2.3 ピア・ラーニング.....	4
2.4 インプット仮説とアウトプット仮説.....	5
2.5 会話タスクの効用性.....	6
<b>第3章 学習者の会話練習の実態</b> .....	<b>8</b>
3.1 実態調査の概要.....	8
3.2 インタビューの分析方法.....	10
3.3 1年生の会話練習の実態.....	11
3.4 2年生の会話練習の実態.....	13
3.5 日本人との会話の実態.....	18
3.6 実態調査のまとめ.....	22
<b>第4章 会話タスクに関する調査の概要</b> .....	<b>23</b>
4.1 会話タスクの概要.....	23
4.2 調査の参加者.....	25
4.3 調査の実施の流れ.....	27
4.4 会話データの分析方法.....	27
<b>第5章 会話タスクの実施と結果</b> .....	<b>33</b>
5.1 会話タスクの実施.....	33
5.2 会話タスクの結果と分析.....	33
<b>第6章 レベル差のある会話活動に対する学習者の認識への調査</b> .....	<b>57</b>
6.1 認識調査の概要.....	57
6.2 認識調査の分析方法.....	57
6.3 認識調査の結果と分析.....	58
<b>第7章 考察 レベル差のある学習者同士が人的リソースとなる視点から</b> .....	<b>66</b>
7.1 学習環境の観点から.....	66
7.2 インプット仮説とアウトプット仮説の観点から.....	69
7.3 協働学習の観点から.....	69
7.4 リソースの活用の観点から.....	70
<b>第8章 まとめと今後の課題</b> .....	<b>72</b>
8.1 中国の大学における日本語会話教育の研究課題への提言.....	72
8.2 会話活動への助言.....	73
8.3 今後の課題.....	73

参考文献

## 第1章 研究背景と目的

近年、学習者のコミュニケーション能力を向上させるには、日本語母語話者との交流が有効だと、数多くの研究で報告されている。だが、中国の大学の場合、学習者にとって、日本語母語話者との接触機会が日本人教師に限られることが多く、その他の機会は少ない。日本語母語話者が極めて少ない中国の大学という学習環境に向けて、稿者は学習者同士のインターアクションに注目し、ピア・ラーニングの新たなあり方を考えた。つまり、授業の枠組みを超えたレベル差のある学習者同士の学び合いである。既存の人的リソースである学習者自身を利用し、レベル差のある日本語専攻の学習者を結んで学習ペアを作り、学習者に会話活動の機会を得させる。クラスの壁を越え、学校という社会の中で、クラス間、学年間の学習の可能性を探る。

## 第2章 先行研究

本章では、本研究に関連する先行研究を概観する。中国の大学のシラバスと学習目的、孤立環境における日本語教育、ピア・ラーニングの定義及びピア・ラーニングにおける「協働」の定義、中国の大学のレベル差のある学習同士のピア活動の実践研究、インプット仮説とアウトプット仮説、会話タスクの効用性について述べる。

## 第3章 学習者の会話練習の実態

中国の大学で学習している学習者の会話力が伸びない原因を解明するため、学習者の教室内及び教室外の会話練習の実態を調査する必要があると考えた。2010年6月中国浙江省南部にあるW大学日本語専攻の協力を得たうえで学習者の会話練習の実態調査を行った。W大学に在学する、日本語専攻の1年生9名、2年生26名を対象として、まず学習者の会話練習の実態に関するインタビュー調査を実施し、佐藤（2008）の質的データ分析法を基に分析を行った。

実態調査の結果、中国の大学の日本語専攻の1年生と2年生の会話練習の相手が、通常は同クラスのクラスメートであることがわかった。また、教室外の会話練習は中国語の環境によって制限され、学習者が機会を得ようと意識していても練習の頻度が全体的に少ないことが明らかになった。教室外での会話練習の実施について、会話練習が重要だと意識しているにも関わらず、実際に自発的な会話練習を行っている者は少なかった。日本人との接触については、1年生はほぼ無いといえ、2年生も接触が少なかった。実態調査から、現時点の会話練習に対して満足しているのではなく、不満や不安を持っている学習者が多いことがわかった。また、クラスメート以外の人と会話練習したいという学習者の声もあった。

## 第4章 会話タスクに関する調査の概要

そこで、ピア・ラーニングの新たなあり方として、レベル差のある学習者間での会話タスクを作成し、会話練習を実施する。本章では、本調査の会話タスクの概要、調査の参加者のレベル評定基準、調査の方法、分析方法などについて述べる。

## 第5章 会話タスクの実施と結果

W大学で本調査の会話タスクを実施し、その会話練習を録音・録画したデータを、堀口（1997）の会話分析の枠組みを援用して分析した。具体的には、会話の内容及び会話の中の聞き手から

の働きかけの頻度を数え、聞き手からの働きかけを「あいづち」、「反復要求」、「説明要求」、「確認要求」、「先取」、「応答」の6つに分けて分析した。その結果、レベル差のある学習者間で行った会話練習には、協働的な活動が見られ、レベル差のある学習者間の会話活動が有効であることが示唆された。

## 第6章 レベル差のある会話活動に対する学習者の認識への調査

また、調査参加者を対象に、レベル差のある学習者同士の会話活動についての認識調査を実施し、前掲の佐藤（2008）を基に分析を行った。レベル差のある会話活動にはメリットがあるかどうかについて、1年生では、今回レベル差のある相手と活動を経験した者と経験しなかった者の認識にはあまり変わりがないが、2年生の経験者と未経験者の認識には大きな差があることがわかった。その要因となるものは、2年生の経験者は実践を通して、自分たちにとって予想外にメリットが大きいことに気付いたことだと思われる。そして、レベル差のある者同士の会話活動に対し、1年生も2年生も参加の意欲が高かったが、学習者自らが計画して実施する困難さも調査で明らかになった。

## 第7章 考察 レベル差のある学習者同士が人的リソースとなる視点から

本章では、レベル差のある学習者同士が人的リソースとなる視点において、学習環境、インプット仮説とアウトプット仮説、協働学習、人的リソースの活用、4つの観点から考察した。レベル差のある学習者同士も、協働的な活動を通して互いに人的リソースとなることによって、学びあいの可能性が十分あるといえる。

## 第8章 まとめと今後の課題

レベル差のある学習者同士の会話活動を実施するには、教室内、教室外を問わず、学年間の授業の時間割の調整や、指導教師の協力や、会話タスクのデザインや、評価の基準などの問題がある。それらの問題を今後の課題としてさらに研究していく予定である。

## 参考文献

- 阿部美紀子 (2009) 「教室における初級学習者の学びのプロセス—学びを促す教室デザインを目指して—」(修士論文概要) 早稲田大学大学院日本語教育研究科
- 池田玲子・館岡洋子 (2007) 『ピア・ラーニング入門：創造的な学びのデザインのために』ひつじ書房
- 岡崎眸・岡崎敏雄 (2005) 『日本語教育における学習の分析とデザイン—言語習得過程の視点から見た日本語教育—』凡人社
- 佐藤郁哉 (2008) 『質的データ分析法：原理・方法・実践』新曜社
- CAG の会編 (2007) 『日本語コミュニケーションゲーム 80』改訂新版 CAG の会 pp.68-69
- 立間智子 (2010) 「ピア・ラーニング利用による自律学習、協働的学習を促す学習環境デザインの試み—アゼルバイジャンにおける日本語学習者と邦人との交流活動「日本語会話クラブ」の実践—」『国際交流基金日本語教育紀要』6 独立行政法人国際交流基金 pp.139-155
- 田中望・斉藤里美(1993)『日本語教育の理論と実践』大修館書店
- トムソン木下千尋 (1997) 「海外の日本語教育におけるリソースの活用」『世界の日本語教育：日本語教育論集』7 独立行政法人国際交流基金 pp.17-29
- 永見昌紀 (2005) 「協働学習を理解する」西口光一編『日本語教師のための知識本：文化と歴史の中の学習と学習者—日本語教育における社会文化的パースペクティブ—』凡人者
- ネウストプニー,J.V. (1999) 「言語学習と学習ストラテジー」宮崎里司・ネウストプニー,J.V. 共編『日本語教育と日本語学習：学習ストラテジー論にむけて』くろしお出版 pp.3-21
- 朴一美 (2010) 「学習ストラテジーと韓国人日本語学習者要因との関係」『人文社会科学論叢』19 宮城学院女子大学 pp.75-90
- 一二三朋子 (2002) 『接触場面における共生の学習の可能性—意識面と発話内容からの考察—』風間書房
- 福島青史・イヴァノヴァマリーナ (2006) 「孤立環境における日本語教育の社会文脈化の試み」『日本語教育紀要』2 国際交流基金pp.49-64
- 堀口純子(1997)『日本語教育と会話分析』くろしお出版
- Brown,G. and Yule, G. (1983). *Teaching Spoken Language*, Cambridge University Press.
- Crookes,G. and Rulon, K.A. (1988) Topic and Feedback in Native-Speaker/Nonnative-Speaker Conversation. *TESOL Quarterly* 22/4.pp.675-681.
- Loschky,L. (1994). Comprehensible input and second language acquisition:What is the Relationship? *Studies in Second Language Acquisition* 16(3). pp.303-323.
- Storch,N. (2002). Patterns of Interaction in ESL Pair Work. *Language Learning* 52. pp.119-158
- Watanabe,Y. and Swain,M. (2007). Effects of proficiency differences and patterns of pair interaction on second language learning: collaborative dialogue between adult ESL learners.*Language Teaching Research* 11. pp.121-142.
- 本研究の調査協力校中国のW大学教務課ホームページ  
<http://www.wzmc.edu.cn/web/xzbm.php> (2011年7月4日アクセス)